

老年看護学実習を通して看護学生が捉えた高齢者観 (第1報)

NURSING STUDENTS' IMPRESSION ABOUT ELDERLY PEOPLE DURING THE CLINICAL PRACTICE OF GERIATRIC NURSING (PART 1)

桑田 恵美子 ・ 山本 和江
KUWATA Emiko, YAMAMOTO Kazue

キーワード：高齢者，看護学生，老年看護学実習

Key Words：elderly people, nursing student, clinical practice of geriatric nursing

要 旨

本研究は，老年看護学実習を通して，看護学生が捉えた高齢者観を明らかにすることにより老年看護学実習の効果と課題を明らかにすることである。対象は老年看護学実習を履修した3年生86名とした。質的記述的研究方法を用いて老年看護学実習で記載した高齢者観を分析した。結果，8カテゴリーと22サブカテゴリーが生成された。看護学生が捉えた高齢者観は，【外見と異なる身体の老化と病気】【老化や病気がもたらす消極的な気持ち】【気持ちが先走り無理をする】【積み重ねられた人生経験の強み】【家族が支える安心】【家族の力になりたい親の気持ち】【安心できる住み慣れた場の暮らし】【セルフケアを通して生活維持を願う】があった。

Abstract

This study focuses on the effects of the clinical practice of geriatric nursing on impressions, which nursing students have, about the elderly people. The investigation was conducted to 86 students who were third-grade, learning the clinical practice of geriatric nursing. The method used qualitative descriptive study. The data is categorized as 8 main categories, 22 subcategories. In detail, the 8 main categories for their impressions of the elderly people are “aging and illness are inevitable”, “negative feelings caused by aging and illness”, “feelings for impatient recovery”, “strength through personal life

experience”, “peace of mind supported by the family”, “I want to keep my family spiritually”, “peaceful life in a familiar place”, and “continue living at home with self-care”.

緒 言

日本の人口の高齢化は著しく、75歳以上人口は増加を続け、2018年には65～74歳人口を上回り、その後も2054年まで増加傾向が続くものと見込まれている [1]。このような人口の高齢化を背景に要介護高齢者や認知症高齢者への介護の問題が課題となり、高齢者やその家族がその健康状態や生活能力に応じて、高齢者の療養生活の場は多様化している [2]。高齢者の生き方に沿った生活が確保できるように、高齢者とその家族を支援していくことが重要となる。その際、看護師がどのような高齢者の印象を持っているかが、看護に取り組む姿勢を形成する源となり、高齢者の看護の質・内容を定めるものとなる [3]。印象とは、人間の心に対象が与える直接的な感じ、また強く感じて忘れられないことである [4]。高齢者の印象を高齢者観とする。看護師は、高齢者を多様な視点から理解することが重要である。

従来日本の高齢者は、敬老思想や家制度により社会的地位が保障されてきた。しかし、戦後の急速な産業化・工業化・都市化の波は、「若さ」・「生産性」・「スピード」を重視する価値観を作り上げ、体力が衰えた高齢者は社会の重要な役割から退けられ、社会的地位も低下したといわれている [5]。高齢者観は、時代や思想などの影響を受ける他、高齢者との交流の質や高齢者への関心、祖父母に対する親の価値観に影響を受けること [5][6]、健康な高齢者との接触が肯定的な影響を与える [7] ことが報告されている。

看護学生の高齢者観に関する研究はすでに多く報告されている。入学から卒業までの高齢者観の経時的変化に関するもの [8]～[10]、臨床実習による高齢者観の変化に関するもの [11]～[14]、高齢者疑似体験後の高齢者観の変化に関するもの [15][16] 等がある。また看護学生へ的高齢者観の調査方法では、Semantic Differential method (SD

法)や文章完成法 [10][11][17] などを用いてアンケート調査しているものが多く、マイナスイメージからプラスイメージの変化を評価基準としており [14]、高齢者の印象が偏ったものになることが指摘されている。また講義・演習・実習の前後で高齢者の見方がどれだけ多様になったか評価すべきであると述べている [15]。

これまで看護学科の学生がどのような高齢者観を持ち、教育の中でどのように変化しているのか明らかにしていない。その第一段階として3年次の老年看護学実習が高齢者観を多様にするためにどのような効果があったのかを明らかにすることは、高齢者を多様に捉える教育の検討につながる。また今後、老年看護学実習で捉えた高齢者観が、老年看護の役割にどのように影響していたのか明らかにすることにつながると推測する。

I. 研究目的

老年看護学実習を通して、看護学生が捉えた高齢者観を明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 調査期間

2019年5月～2022年1月

3. 対象者

対象者は老年看護学実習を履修した3年生86名とした。学生は2年生より老年看護学(老年看護学概論1単位、老年看護学援助論I 1単位、老年看護学援助論II 2単位)を履修した。3年生では、老年看護学実習3単位(病院実習2単位、介護老人保健施設1単位)を履修した。

4. データ収集法

老年看護学実習を通して、実習課題である「対象の人生や人生観に触れることにより、高齢者観を深めることができたか」について、用紙に高齢者観を自由に記載してもらった。実習終了後、他の記録物と共に提出された実習記録をデータとした。

5. 分析方法

提出された実習記録を質的記述的研究方法[18]にもとづき分析した。分析の視点：「看護学生は老年看護学実習を通してどのような高齢者観を持つことができたのか」の部分抽出した。文脈ごとに類似性・規則性、特殊性を観察し、質的データを意味のまとまりごとに分類し「コード」[18]とした。[コード]から全体の感覚をつかみ、何度も読みそこにある高齢者観を発見した。また真実性と妥当性[19]を確保するため、恣意的なデータ変更、飛躍しすぎた解釈になっていないか、解釈、定義、サブカテゴリーをデータと確認しながら整合性を高めた。抽象度を上げて〈サブカテゴリー〉から【カテゴリー】を生成、どのようなカテゴリーであるのか説明し、サブカテゴリーが含まれていることを確認した。【カテゴリー】は、共通性や多様性を分析し全体像を図に示した。

6. 倫理的配慮

老年看護学実習評価終了後、学生の実習記録を使用するにあたり、対象者に口頭で研究の趣旨および内容について説明し、同意を得た。研究への協力は対象の自由意思によるもので、拒否が可能であること、拒否によって成績上何ら不利益を生じないことを説明した。得られたデータは研究者のみが取り扱い、本研究以外で使うことがないことを説明した。また本研究結果は論文などで発表するが、その際個人情報に関することは、個人が識別されないようにコード化した上で使用することを伝え、学生より承認を得た。

Ⅲ. 結果

老年看護学実習を履修した86名の実習記録を分析した結果、8カテゴリーと22サブカテゴリー、104コードが生成された。カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〈 〉, コードは「 」で示す。更にこれらのカテゴリー間に内在する関連性から老年看護学実習で学生が捉えた高齢者観の全体像を述べる。

1. 老年看護学実習における学生が捉えた高齢者観の全体像（図1）

老年看護学実習における学生が捉えた高齢者観は、8カテゴリーから構成されていた。高齢者を【外見と異なる身体の老化と病気】【老化や病気をもたらす消極的な気持ち】【気持ちが先走り無理をする】と捉えていた。高齢者の老化や病気をもたらす影響を支えているのは、【積み重ねられた人生経験の強み】【家族が支える安心】であった。また家族に支えられるだけではなく【家族の力になりたい親の気持ち】も持っていた。そして【安心できる住み慣れた場の暮らし】と【セルフケアを通して生活維持を願う】を望んでいた。

2. 各カテゴリーについて

各カテゴリーを構成するサブカテゴリーとその定義及び、コードについて述べる。

1) 【外見と異なる身体の老化と病気】

【外見と異なる身体の老化と病気】とは、外見とは異なり、高齢者が老化や病気は避けられないと捉えていることを示す。

2サブカテゴリー〈見た目と身体は異なる〉〈老化の自覚〉が含まれていた。

(1) 〈見た目と身体は異なる〉

定義：外見は元気そうでも、多くの既往歴や疾患を持っていること。

3コード、「見た目は元気そうでも多くの疾患を持っている」等があった。

(2) 〈老化の自覚〉

定義：年齢を重ねるごとに老化を自覚している

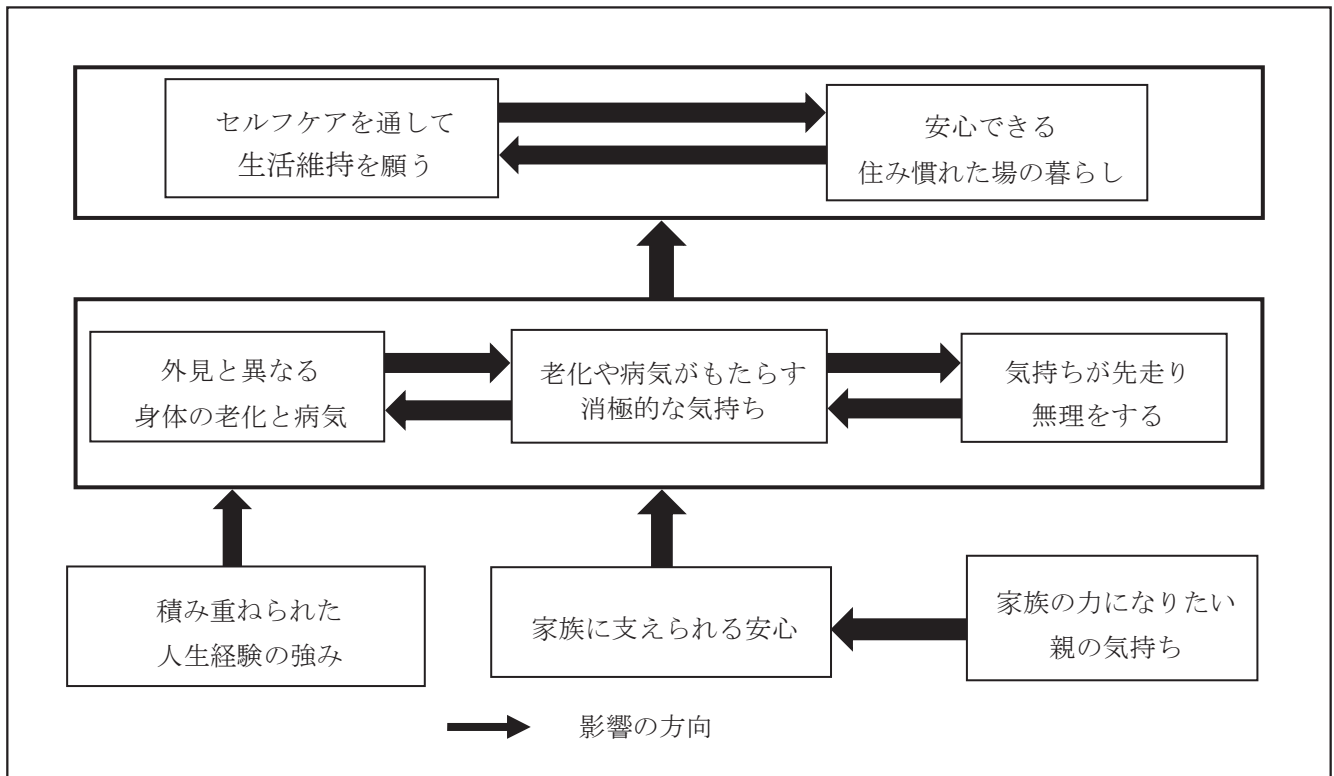


図1. 老年看護学実習における学生が捉えた高齢者観の全体像

こと。

2コード, 「年齢を重ねるごとに身体の変化を自覚している人が多い」等があった。

2) 【加齢や病気がもたらす消極的な気持ち】

【加齢や病気がもたらす消極的な気持ち】とは、高齢者が加齢や病気により家族や周囲に迷惑をかけることへの気遣いや不安があることを示す。

7サブカテゴリー 〈迷惑をかけないように気遣い, 我慢〉〈できていたことができなくなる辛さ〉〈病気や障害がもたらす今後への不安〉〈他者に委ねられる意思決定〉〈喪失体験による孤独感・悲哀〉〈忘れていくことへの戸惑い〉〈経済面への不安〉が含まれていた。

(1) 〈迷惑をかけないように気遣い, 我慢〉

定義：家族や周囲に迷惑をかけないように気遣いや我慢をしていること。

8コード, 「家族の負担にならないようにできることはしている」「自分がどこにいれば(家族に)迷惑にならないか気にしている」等があった。

(2) 〈できていたことができなくなる辛さ〉

定義：老化や病気により体が思うように動けず自尊心が傷つけられること。

3コード, 「転倒や失禁などにより, できなくなることで自尊心が傷つけられる」「介助されることで自尊心を傷つけられる」等があった。

(3) 〈病気や障害もたらす今後への不安〉

定義：病気や障害が今後の生活に影響をもたらすことへの不安があること。

7コード, 「一生懸命生きてきたからこそ, 病気で思うように動けないことに不安が大きい」等があった。

(4) 〈他者に委ねられる意思決定〉

定義：老化や病気により他者の意思決定に沿うことが多くなること。

1コード, 「他者に意思決定を委ねることが多くなる」があった。

(5) 〈喪失体験による孤独感〉

定義：老化に伴う役割喪失や, 家族・友人の死が孤独感をもたらしていることを示す。

3コード, 「家族や配偶者, 友人の死は喪失感・

孤独感を抱かせる」等があった。

(6) 〈忘れていくことへの戸惑い〉

定義：認知症の人は不安や戸惑いの中にいること。

2コード、「認知症の人は忘れていくことへの戸惑い、孤独の中にいる」等があった。

(7) 〈経済面への不安〉

定義：老化や病気による今後の経済的不安があること。

1コード、「老化や病気により経済面の基盤が弱くなりやすいため、不安が予測される」があった。

3) 【気持ちが先走り無理をする】

【気持ちが先走り無理をする】とは、回復への気持ちが先走りしていることを示す。

1サブカテゴリー〈回復への気持ちが先走り無理をする〉が含まれていた。

(1) 〈回復への気持ちが先走り無理をする〉

定義：回復への前向きな気持ちが先走りするが、体調とかみ合わないこと。

3コード、「疲労があっても、回復したいと気持ちが先走ることによって転倒・転落につながる」「痛みがあっても（リハビリ）やりたいと頑張る」等があった。

4) 【積み重ねられた人生経験の強み】

【積み重ねられた人生経験の強み】とは、長い人生で積み上げられた経験が、老化や病気がもたらす影響を乗り越える強みとなることを示す。

6サブカテゴリー〈前向きに生きる〉〈人生の積み重ねた強さ〉〈積み重ねられた人生経験が自信、信念〉〈人柄や価値観はその人の人生そのもの〉〈記憶力が低下しても、変わらないその人らしさ〉〈伝えたい人生経験〉が含まれていた。

(1) 〈前向きに生きる〉

定義：病気や老化に伴う影響があっても前向きに生きてると捉えていること。

10コード、「過去の体験や思いを持ちながら、前向きに生きています」等があった。

(2) 〈積み重ねた強さ〉

定義：年齢を重ねるごとの豊富な経験が強さに

なっていること。

15コード、「辛い体験を乗り越えたからこそ、多少の困難を受け入れ前向きでいられる」等があった。

(3) 〈積み重ねられた経験が自信、信念〉

定義：人生経験が高齢者の自信、信念となっていること。

6コード、「大事にする信念を持っている」「積み重ねられた経験が自信」等があった。

(4) 〈人柄や価値観はその人の人生そのもの〉

定義：人柄や価値観はその人の人生経験の中で培われたものであること。

10コード、「人柄や性格からその人がどのような人生を送ってきたか知る」等があった。

(5) 〈記憶力が低下しても、変わらないその人らしさ〉

定義：記憶力が低下してもその人が大切にしてきたことは変わらないこと。

3コード、「認知症の人が昔のことを話してくれる時、表情が明るく充実した人生を送っていたと感じた」等があった。

(6) 〈伝えたい人生経験〉

定義：人生の大切な経験を伝えたいこと。

9コード、「繰り返す話は、良い思い出で誰かに伝えたいという気持ちがある」等があった。

5) 【家族が支える安心】

【家族が支える安心】とは、家族が老化や病気がもたらす影響を支えていることを示す。

1サブカテゴリー〈家族が支える前向きな気持ち〉が含まれていた。

(1) 〈家族が支える前向きな気持ち〉

定義：家族が身体の衰えや病気、死への不安を緩和して、支えてくれていると感じること。

4コード、「身体の衰えや身近な人の死等乗り越える力は家族の支え」「家族との触れ合いが生きがい」等があった。

6) 【家族の力になりたい親の気持ち】

【家族の力になりたい親の気持ち】とは、親として家族の力になりたいと思うことを示す。

1サブカテゴリー〈親として家族にしてあげた

い)が含まれていた。

(1)〈親として家族にしてあげたい〉

定義：親として家族に何かしたいと考えていること。

1コード、「いくつになっても『何かをしてあげたい』親の気持ちに変わりが無い」があった。

7)【安心できる住み慣れた場の暮らし】

【安心できる住み慣れた場の暮らし】とは、住み慣れた場の暮らしが安心できることを示す。

2サブカテゴリー〈住み慣れた場は安心〉〈住み慣れた環境が変わる不安〉が含まれていた。

(1)〈住み慣れた場は安心〉

定義：住み慣れた場の暮らしは安心できること。

3コード、「住み慣れた地域で穏やかに暮らすことを望んでいる」「同世代や同じ地域の人と話す笑顔になっている」等があった。

(2)〈住み慣れた環境が変わる不安〉

定義：住み慣れた環境から離れることは不安があること。

2コード、「慣れ親しんだ環境から離れることは寂しさ、孤独感を感じさせる」等があった。

8)【セルフケアを通して生活維持を願う】

【セルフケアを通して生活維持を願う】とは、人に頼らず、今まで通りの生活維持を願うことを示す。

2サブカテゴリー〈自分らしい生活〉〈人に頼らず生活したい〉が含まれていた。

(1)〈自分らしい生活〉

定義：生活がいつも通り行えること。

3コード、「他者と交流しながら自分らしく生きている」「普段の生活をいつも通りに行えることが生きがい」等があった。

(2)〈人に頼らず生活したい〉

定義：人に頼らず、自分で生活したいと思っていること。

5コード、「あまり頼らず、自分で生活したい」「退院して自分一人で生活したいと頑張っている」等があった。

IV. 考 察

本研究は、老年看護学実習を通して学生が捉えた高齢者観を分析した。その結果、【外見と異なる身体の老化と病気】【老化や病気がもたらす消極的な気持ち】【気持ちが先走り無理をする】【積み重ねられた人生経験の強み】【家族が支える安心】【家族の力になりたい親の気持ち】【安心できる住み慣れた場の暮らし】【セルフケアを通して生活維持】の8カテゴリー及び、22サブカテゴリーが生成された。

【外見と異なる身体の老化と病気】は、〈見た目には元気でも多くの病気を持っている〉〈老化の自覚〉から成る。高齢者は、外見は元気そうに見えるが、老化の自覚や複数の病気を持っていると捉えていた。また【老化や病気がもたらす消極的な気持ち】は、〈迷惑をかけないように気遣い、我慢〉〈できていたことができなくなる辛さ〉〈病気や障害がもたらす今後への不安〉〈他者に委ねられる意思決定〉〈喪失体験による孤独感〉〈忘れていくことへの戸惑い〉〈経済面への不安〉から成る。老化や病気が、高齢者の心理面にもたらす影響を消極的な気持ちと捉えていた。多田 [12] は、看護学生が臨地実習を体験する場は高度な医療が行われている病院や、老人福祉施設であり、大半が病弱であるため高齢者の印象は病弱者に対するものとなり、暗いイメージで捉えてしまうと報告している。本研究でも同様に実習場は、高度な医療が行われている病院や介護老人保健施設であった。高齢者は老化の自覚や病気の影響を受け、消極的な気持ちであると捉えていた。しかし異なる点は、外見が元気そうであると捉えていたことである。高齢者の観察や会話などを通して“外見が元気”と明るいイメージで捉えていたことは先行研究と異なる視点である。外見は元気そうに見えるが、老化や複数の病気を持っているため、看護師は高齢者の非定型的症状の観察、異常の早期発見をする必要がある。そのためこの理解は、高齢者の観察の重要性につながると推測できる。

【気持ちが先走り無理をする】は、〈回復への気

持ちが先走り無理をする〉から成る。回復への前向きな気持ちが先走るとは転倒・転落につながるため、高齢者にとって危険である。この理解は高齢者の転倒・転落予防の援助につながると推測できる。

【積み重ねられた人生経験の強み】は、〈前向きに生きる〉〈人生の積み重ねた強さ〉〈積み重ねられた人生経験が自信、信念〉〈人柄や価値観はその人の人生そのもの〉〈記憶力が低下しても、変わらないその人らしさ〉〈伝えたい人生経験〉から成る。積み重ねられた人生経験が高齢者の強みと学生が捉えたことは、実習を通して高齢者の人生経験に触れ、前向きに闘病する姿を見たことから挙げられたことであると推測される。菱沼らの調査〔9〕では老人について最も共通したことは、人生経験の長い老人をその意味から認め、その知恵を認めたイメージがあったと報告している。同様の結果であった。しかし実習では更に、積み重ねられた人生経験が老化や病気がもたらす高齢者の消極的な気持ちを支え、「過去の体験や思いを持ちながら、今を前向きに生きている」と捉えることにつながっていた。人生経験の長い高齢者という視点だけでなく、積み重ねた人生経験が前向きに生きる強さにつながると理解していた。

【家族が支える安心】は、「家族が支える安心感が闘病意欲の向上につながる」と捉えており、【積み重ねられた人生経験の強み】同様に、老化や病気がもたらす高齢者の消極的な気持ちを支えていると、理解していた。岩鶴らの調査〔8〕では、家族のサポートや社会資源の活用キーワードが少なかったと報告している。本研究では量的な調査はしていないが、家族が支える安心感が闘病意欲につながると捉えていた。学生は実習を通して家族の支えの重要性を学んでいた。鈴木ら〔20〕は、家族が他の家族成員に対して医療従事者では補うことのできない独自の能力を備えており、それを引き出すことは家族の健康問題の解決に重要であると述べている。高齢者を捉える上で、家族の支えのワードが出たことは重要であった。今後は高

齢者を支える家族の視点でも考えが深められるような指導が必要である。

【家族の力になりたい親の気持ち】は、〈親として家族にしてあげたい〉から成る。学生は、【老化や病気がもたらす消極的な気持ち】と高齢者の心理を理解する反面、「いくつになっても『何かをしてあげたい』親の気持ちに変わりがない」を通して、高齢者の親としての思いも理解できていた。老年期は家庭内役割の交代等、衰退を経験するが、親としての存在は変化しない。高齢者が衰退をどのように受け止め、どのような思いを抱いているのか理解することが重要である。本調査を通して、高齢者の親としての思いを学生が理解できていたことは、高齢者の心に寄り添う沿う看護につながると推測できる。

【安心できる住み慣れた場の暮らし】は、〈住み慣れた場は安心〉〈住み慣れた環境が変わる不安〉2サブカテゴリーから成る。このカテゴリーは安心と不安の拮抗する内容であった。高齢者にとって住み慣れた生活の場が変更されることは大きなストレスとなる。老化や病気により住み慣れた場を離れ、療養する不安や住み慣れた場に戻りたい思いを、改めて理解することができたことと推測できる。住み慣れた場への支援として“時々入院、ほぼ在宅”を支援する地域包括支援システムと関連づけ理解できる指導が必要である。

【セルフケアを通して生活維持を願う】は、〈自分らしい生活〉〈人に頼らず生活したい〉から成る。「普段の生活をいつも通りに行えることが生きがい」と高齢者のセルフケアの願いを理解した内容であった。老化や病気により家族や周囲に迷惑をかけることへ消極的な気持ちを持っている高齢者にとって、生活がいつもの通り行えることが願いであると捉えることができていた。その理解は高齢者のQOLを高める支援につながる。【セルフケアを通して生活維持を願う】高齢者を支援するため、社会資源活用の視点も指導が必要である。

本研究の限界と今後の課題

本研究は、3年生を対象とした老年看護学実習

を通して、学生が捉えた高齢者観を明らかにしたものである。学生の捉えた高齢者観が、老年看護学実習を通して看護の質にどのように影響したか、明らかにできていない。本調査の対象が老年看護の役割についてもどのように理解したのか更なる分析を進めたい。高齢者観を豊かにしていくためには、その年度で学生の状況が異なるため、研究として蓄積し看護実践の指導に活用できるようにする必要がある。

V. 結論

老年看護学実習を通して86名の実習記録から学生が捉えた高齢者観を分析した結果、8カテゴリと22サブカテゴリが生成され、以下のことが明らかになった。

1. 高齢者を【外見と異なる身体の老化と病気】
【老化や病気がもたらす消極的な気持ち】
【気持ちが先走り無理をする】と捉えていた。
2. 高齢者の老化や病気がもたらす影響を支えているのは、高齢者の【積み重ねられた人生経験のみ】である〈前向きに生きる〉〈人生の積み重ねた強さ〉〈積み重ねられた人生経験が自信、信念〉〈人柄や価値観はその人の人生そのもの〉〈記憶力が低下しても、変わらないその人らしさ〉〈伝えたい人生経験〉であった。また【家族が支える安心】は、〈家族が支える前向きな気持ち〉であった。
3. 【家族の力になりたい親の気持ち】は、高齢者が家族に支えられるだけではなく〈親として家族にしてあげたい〉であった。
4. 【安心できる住み慣れた場の暮らし】は、〈住み慣れた場は安心〉〈住み慣れた環境が変わる不安〉であり、【セルフケアを通して生活維持を願う】は、〈自分らしい生活〉〈人に頼らず生活したい〉であった。

謝辞

本研究にご協力頂きました看護学生の皆様、実

習指導の非常勤講師の皆様、ご指導いただきました実習施設の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

- [1] 内閣府:平成30年高齢社会白書。
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/sl1_1_1.html (2019年2月13日引用)
- [2] 厚生労働省:厚生労働省における高齢者施策について。
www.moj.go.jp/content/000123298.pdf (2019年1月7日引用)
- [3] 大谷英子, 松本光子:老人イメージと形成要因に関する調査研究(1) 大学生の老人イメージと生活経験の関連. 日本看護研究学会雑誌. 1995; 18 (4) : 25-38.
- [4] デジタル大辞泉:
<https://kotobank.jp/dictionary/daijisen/242/> (2019年2月21日引用)
- [5] 保坂久美子, 袖井孝子:大学生の老人イメージ-SD法による分析-. 老年社会科学. 1988; 27 : 22-33.
- [6] 竹田恵子, 太湯好子:中学生の老人イメージとその形成に関する要因. 川崎医療福祉学会誌. 2002;12 (1) : 161-167.
- [7] BeullensJ, MarcoenA, JaspertH, etal: Medical students' image of the elderly and the effect of medical education: a literature review. Tijdschr Gerontol Geriatr. 1997; 28 (4) : 178-84.
- [8] 岩鶴早苗, 天津榮子, 水田真由美, 他:看護学生の高齢者観育成に関する研究(第2報)-3年間を縦断的にみる高齢者観の分析-. 和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要. 2001; 4 : 37-46.
- [9] 菱沼典子, 太田喜久子, 小山真理子, 他:看護学生の老人イメージについての一考察. 看護教育. 1995; 36 (8) : 730-735.
- [10] 鳴海喜代子, 野口美和子, 土屋陽子, 他:看護学生の老人観に関する研究 第一報.

- 千葉大学看護学部紀要. 1985 ; 7:1-9.
- [11] 鳴海喜代子, 佐藤敏子, 藤沢聡子, 他 : 看護学生の老人観に関する研究 第3報 - 臨床実習終了後の変化 -. 千葉大学看護学部紀要. 1988; 10: 13-23.
- [12] 多田敏子 : 老年看護学における臨地実習による看護学生の高齢者に対する印象の変化. 老年看護学. 1996 ; 1 (1) : 63-70.
- [13] 金原京子, 小川宣子, 田中真佐恵, 他 : 早期体験型の老年看護学実習における看護学生の学びの様相 - 実習前後での高齢者イメージ・高齢者観に焦点を当てて. 摂南大学看護学研究紀要. 2018 ; 6 (1) : 42-49.
- [14] 前畑夏子, 服部ユカリ, 成瀬優知, 他 : 老人看護実習による看護大学生の老人イメージの変化. 富山医科薬科大学看護学会誌. 1999 ; 2: 103-116.
- [15] 高岡哲子, 留畑寿美江, 服部ユカリ : 看護学生の「高齢者疑似体験」後の高齢者観と教育プログラムの検討. 旭川医科大学研究フォーラム. 2005;6 (1) : 33-42.
- [16] 森久保好文, 中村真理子, 服部紀子 : 高齢者の理解を支援するための教育方法の検討 - 高齢者疑似体験による課題レポートの分析から -. 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報. 2000 ; 10 : 3-12.
- [17] 今井雪香, 片山万里, 柳田泰義 : 老人イメージに関する調査 (2) 看護学生と一般大学生との比較. 神戸大学発達科学部研究紀要. 19986; (1) : 225-233.
- [18] 谷津裕子 : Start Up 質的研究第2版, 学研メディカル秀潤社, 東京, 2015, pp.98-140.
- [19] 萱野真美 : 質的研究実践ノート 研究プロセスを進める clue とポイント, 医学書院, 東京, 2008, pp.75-79.
- [20] 鈴木和子 : 家族看護学とは何か, 家族看護学 理論と実践, 第4版, 日本看護協会出版会, 東京, 2012, pp.21-25.

